

看護学の発展にとっての 理論構築

Transitions Theory からの展望

看護理論を初めて学んだとき、「理論なんて所詮は絵に書いた餅。目の前のこの途方に暮れるような混沌とした現状は、そんなものではどうにもならない」と思った。しかし、そのように看護現象が混沌としたものであるからこそ、それを照らし出し、効果的な実践を導くために看護理論が必要なのだ。

研究と実践を経て、複雑な看護現象はその本質が抽出され、理論が構築されていく。理論は複雑な看護現象を解き明かし、また予測することで実践を導く。そして、実践により理論は試され、研究により精練されていく。この循環は、看護学の発展には不可欠だ。

このように理論は、研究と実践との循環の中で新たに生み出され、より有用なものへと、とどまることなくその姿を変えていかねばならない。過去のものでも、完成されたものでもない。理論はクリティックされ、開発され、精練され、活かされていく必要がある。

私たちはこれまでに数多くの理論を学び、実践に適用・応用してきた。しかし、いままでは、「使う」ことに重点が置かれ、「つくる」ことには十分力を入れてこなかったのではないだろうか。

もう10年近く前のことになるが、当時 *Theoretical Nursing : Development & Progress* の第4版を執筆されていた Dr. Afaf I. Meleis(当時はペンシルベニア大学看護学部長)から、日本で生まれた理論の紹介を依頼されたことがある。そのとき、理論構築が研究や教育の場で十分なされていない現状に気がついた。一方、「理論」とはいえないまでも、例えば、修士論文、博士論文においては、数多くの実践モデルが生まれ、実践での可能性が試みられている現状もある。

昨年、その Dr. Meleis が、災害看護グローバルリーダー養成プログラムで来日された。兵庫県立大学ではセミナーが開催され、看護理論構築について振り返り、その重要性を学ぶ機会を得た。このセミナーを機に、今回、看護理論とは何かを改めて考える特集を企画した。特集ではまず、兵庫県立大学大学院博士課程で理論看護学を長年教えてこられた南裕子先生(高知県立大学学長)と片田範子先生(兵庫県立大学看護学研究科長)に、理論看護学とは何か、看護研究者となるためになぜ理論看護学を学ぶことが必要なのか、そして理論構築の方法と学び方について語っていただいた。

この対談を踏まえ、現在の看護理論の概要とともに、看護理論の発展において Dr. Meleis の理論がどのように位置づけられてきたかを考える。その上で、Dr. Meleis が開発した Transitions Theory とともに、今回の来日講演の内容を紹介する。そして最後に、Transitions Theory をベースに、Dr. Meleis とともに状況特定理論 (Situation-specific Theory) を構築してきた Dr. Eun-Ok Im に、状況特定理論の開発経緯や現状、そして今後の理論構築の展望を示していただく。より具体的な理解をめざすため、併せて Dr. Im の状況特定理論の構築例を紹介する。

理論と研究は、看護実践を向上させるための車の両輪である。この2つは、大学院教育においてもコアコースとして重要な科目であろう。米国の博士課程では通常、看護理論のコースが前期と後期で2つ設置されており、前期は哲学的視点に関する講義、後期は理論構築に関する講義が展開される。さらに理論構築に興味をもつ学生は、independent studies の科目をとり、教員とともに理論構築に挑むのである。博士課程が70を超えたわが国においても、理論構築の教育に力を入れるべき時を迎えていると、筆者は強く思う。

企画：坂下玲子 (兵庫県立大学看護学部教授)